

「生きている」実感を与えられる自然観察指導員へ

秋山幸也

1 楽しく有意義な議論から生まれた計画

私は昨年、自然観察指導員養成計画 2030 検討ワーキンググループの一員として、計画作成に参画させていただきました。広くて深い見識と、人間的な魅力にあふれるメンバーのみなさんと、何より楽しく、有意義な議論を重ねることができました。今回公表された計画は、そうした議論の結果を、事務局のみなさんが練りに練って明文化してくれたものです。とは言え、議論の過程や思考の積み上げをすべて反映させることはできませんし、簡潔にという制約から、もしかしたら伝わりにくい点もあるかもしれません。また当然、異なる御意見もあることと思います。そうしたことも含め、この計画をまな板の上に乗せて、私たちもみなさんも当事者の立場から活発に議論していくことが大切だと考えています。

2 カッコイイ指導員、魅力的な自然観察会

今、本計画について私がみなさんへお伝えしたいことは、山のようにあります。でも、指導員が全国からこれだけ集まり顔を合わせる機会はそうありません。今日は、計画の中で最もお伝えしたいことに絞ってお話いたします。それは、**全国の指導員活動の理想像**についてです。

社会や私たちを取り巻く状況が変化する中で、自然に対する社会の意識も変わってきました。自然保護が開発との対立軸となっていた高度経済成長期直後から、今は、自然はもちろん保護（できるなら）したほうが良い、という認識へ変化してきました。さらに今、持続可能な利用こそが保護につながるという国際的な方向性が定着しつつあります。ライフスタイルとして、環境に配慮した生活がカッコイイ、魅力的という認識もすでに一般化していると言ってよいでしょう。

①あらめて、マイ・フィールドにこだわる

そうした中で、指導員として活動する人の魅力とはどのようなものとなっていくのでしょうか。一つには、**マイ・フィールドを持っていて、そこでじっくり腰を据えた活動をしている**こと。この点は、10 年前にもすでにトコロジストという言葉が提唱され、指導員講習会のテキストにも登場しています。言葉の普及はともかくとしても、マイ・フィールドの大切さはだいぶ理解が進んでいると思われます。一般化された事象、つまり「図鑑や教科書に載っていること」よりも、さらに進んだ知見として「図鑑にはこう書いてあるが、ここでは・・・」と言えることがカッコイイ、さらにそうした事例が集まって図鑑や教科書が書き換えられていくような知見と、それを持っている人が魅力的であるような方向性を、これからも追求していきたいと思います。例えば、

- ・その土地の去年の様子、5 年前、10 年前のできごとや環境を語ることができる
- ・その土地の言葉を使いこなせる、季節感を方言で表現できる
- ・その土地独特の山の幸、海の幸の味わい方、旬の時季を語れる

世代交代と情報化が進み、社会が均一化していく中で、そうした知見が失われつつあることは疑う余地はありません。だからこそより重要になるだろうし、そうしたことこそカッコイイ！と思われるのではないでしょうか。

②生きざまというよりも、生きていく軸になるもの

私たちは今後、ますます仮想と現実、そしてそのはざまの使い分けが必要になっていくことでしょう。そして、その中で個人はいろいろな顔を持ち、パラレルにそれぞれの社会を生きていかななくてはなりません。かつてのように、ナチュラリストという生きざまとして、人格全体で自然との関わりを追求していくようなことは難しくなっていくと思います。

そのような中で、これからの自然観察指導員は、**いろいろな社会との関わりの中で自然観察を軸に活動している人**でありたいと思います。仕事で、学校で、地域で、家庭で、ネット上で・・・さまざまな顔を持ちつつも、一貫して自然観察指導員としてのふるまい、思考、判断をしていきたい。指導員として培ったこと、「自然観察から始まる自然保護」の理念を軸に活動の場を広げ、深めていきたい。そんな理想を掲げたいと思います。そしてその結果として、社会のさまざまな場面で自然観察とコラボレーションした新しいアクティビティなどが産み出されていくのではないのでしょうか。これからの10年、みなさんとチャレンジをしていきたいと思います。

③“リアル”を提示できる自然観察指導員

情報過多のこの時代、私は、リアルを提示できるのが自然観察だと考えています。頭の中や仮想現実の中で「わかったつもり」になっていることを、今、目の前にある自然を「観察」することで打ち砕いたり、現実の感覚を呼び覚ましたりするきっかけにできるのが自然観察なのではないでしょうか。それを導く存在が自然観察指導員であり、**「生きている」実感を与えられる人**。そこにある自然に対して謙虚な姿勢を持ちつつ、自然の不思議を感じて、その楽しさを共有できる人。そんな自然観察指導員は間違いなく「カッコイイ」存在だと思うのです。

繰り返しになりますが、そうした自然の見方の根拠を裏付けてくれるのが、マイ・フィールドでの活動であることは言うまでもありません。

3 この大会で“せっかくだから”みなさんに考えて欲しいこと

2030 ビジョンの2で挙げられている、「**自然観察指導員によって豊かな自然がまもられ、自然との関わりの少なかった人でも何度でも行きたくなる、自然の恵みを実感できる魅力的な場所**」のネーミングを考えていただけないでしょうか。ワーキングでも、何度もそのネーミングを考えてみましたが、結局絞り込めませんでした。

そして、自然観察指導員という名称について。「指導員」という言葉が時代にそぐわなくなっているという指摘もあります。もちろん正式な名称は残すとして、何か良い言い換え、愛称などがないでしょうか。

採用されるかどうかはわかりません。でも、顔をつきあわせて話せるせっかくの機会です。ぜひ、休憩時間や分科会などの合間に、楽しくみなさんと考えてみてください。